

令和5年度新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生方による指導・助言

～小学校編～

山形県教育局義務教育課

ご指導いただいた先生方

佐藤 博晴 先生 (山形大学)

小泉 有紀子 先生 (山形大学)

金森 強 先生 (文教大学)

阿野 幸一 先生 (文教大学)

酒井 英樹 先生 (信州大学)

太田 洋 先生 (東京家政大学)

阿部フォード 恵子 先生 (CALAグローバル)

青柳 敦子 先生 (山形県立長井高校)

吉澤 孝幸 先生 (秋田県立秋田南高校中等部)

山口 常夫 先生 (東北文教大学)

大山 慎一 先生 (東北公益文科大学)

英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。



フィードバック

活動の後に、児童にどんな問いかけをしますか？

「何人とやり取りできた？」 → 単に「人数」に意識

「一番心に残ったやり取りは誰だった？ どうして？」 → 「内容」などに意識

ねらいに応じて、やり取りの「内容」や「英語使用の正確さ」を振り返るような問いかけをするとよいでしょう。



天気は？ 日付は？ 何曜日？ ...

毎時間、機械的な応答に終始していませんか？

→ 「日付」を誕生日の児童に聞いて、そこから誕生日の話題に広げ、

「What do you want for your birthday?」など、全体でやり取りをする

→ 雪が降っている日に先生が「Oh, it's sunny today.」と言った冗談に、

「No! It's snowy today.」としっかり聞いて応答できる

など、しっかり聞いて考えなどを伝え合える児童を育てたいですね。



中間指導は…

▲ 教師が説明する時間 → ○ 児童が「自己評価」する時間

授業のめあてや言語活動の目的・場面・状況に対して、

- ・自分の表現はどうだったかなどを児童が考える
- ・他の児童の表現で良い点を共有する

など、児童が気付いて考える場を充実させましょう。



外国語活動の学習例

活動に視点をもたせるようにすると、児童の活動に目的ができます。

(例) Unit 7 「What do you want?」(Let's Try! 2)

「お客さんがまた来てくれるような接客を考える」

→ 目的・場面・状況に応じた言葉や態度を考えるようになる

「誰かのためにピザを作って送る」

→ 「私は忙しい〇〇先生のために、栄養満点ピザを作ろう!」 など



質問の工夫

段階的な質問をすることで、みんなが応答できたり、自分の考えをもったりすることにつながるでしょう。

(例) 「What do you want to be?」

↓ Do you want to be a teacher? (Yes / No)

Do you want to be a teacher or a doctor? (選ぶ)

↓ What do you want to be?



十分なインプットの確保

× はじめから「文字」を見て読む → ○ まずは「音」でたっぷり聞く

意味などの推測を助けるために、身振りを入れたり、実物や写真を見せたりするのもよいでしょう。英語のイントネーションやアクセントに気付かせることも大切です。

様々な文脈や活動の中でインプットする機会を十分に確保しましょう。



Fingertip Communication

Fingertip communication

= 腕を伸ばしてお互いの指先が触れる距離で会話する

顔をあげて話したり、相手に聞こえる声で話そうとしたりする姿につながります。

聞こえなければ、「Sorry?」など聞き返す姿勢も育みたいですね。



目的が明確になれば…

言語活動を行う際に、「誰に(と)」「何のために」コミュニケーションを行うのか、児童が意識できていますか？

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを児童が意識できると、「自分の考えを伝えるために何を言うか」を思考し、「正しく伝えられるように何をすべきか」などの**学び方**を児童が考え出すでしょう。学び方に気付かせる支援をしながら、価値付けたいですね。



英語使用の正確さ

多くのことを伝えようとすれば、表現の誤りも増えてきます。

このような時は、**すぐに誤りを正すのではなく、児童の表現した「内容」を大切に指導するとよいでしょう。**

「内容」を大切にしながら、コミュニケーションに支障をきたしているか、聞き手に通じているかという視点で、「どう言えば正しく伝わるか」を児童が考えられるように指導を行いましょう。



Ask me!

授業では、教師が質問して児童が答えるという形になりがちです。

→ 教師が「Ask me!」と問いかけるなど、児童から質問を促す

児童同士で質問したりする機会を設ける

などの指導を行いながら、児童が質問することに慣れ、やり取りを継続する力を育みたいですね。



言い換える力

伝えたい内容があっても、そのままでは語句や表現などが難しくて言えないことがあります。

→ 学んだ語句や表現で表せないかを考える

既習事項を活用して言いたいことを伝える力を育むことにつながります。



語句の学び

例えば、「my favorite place」を、
「my = 私の」 「favorite = お気に入りの」 「place = 場所」
と一つ一つの単語を切り離して指導するよりも、
「自分のお気に入りの場所を言いたい」 → 「my favorite place」
と使用場面とあわせて、かたまりで慣れ親しむようにするとよいでしょう。



「指導・助言 ～中学校編～」も、授業改善のヒントになる
内容がたくさんあります。

小中連携の観点からも、ぜひ参考にしてください。

